



祝辞を述べる中島秀之氏

報告

IEEE Computer Society 60周年記念式典報告

中島秀之 (公立はこだて未来大学)

IEEE Computer Society の60周年記念式典が10月30日にサンディエゴで開催された。私は情報処理学会代表(会長代理)として出席してきたのでその模様を報告したい。

本学会事務局から打診があったときにはすでに前後の予定が詰まっていた。記念式典への出席のためだけに成田からサンフランシスコ経由で片道合計10時間以上のフライト(さらに国内で函館から成田への移動とサンフランシスコでのトランジットが入る)でサンディエゴを往復するのは大変だとも思ったが、IEEE CSのDeborah Cooper 会長にはFIT 2006で特別講演をお願いした経緯もあり、行かねばなるまいと決意した。

IEEE CSの60周年ということで、盛大な式典を予想していたのだが、参加者100名程度と案外こじんまりとしたものであった(図-1)。会長挨拶に引き続き私が情報処理学会からゲストとして参加している旨が紹介された。特にこの3時間の式典だけのために日本から来たことに大変感謝してくれた。私は安西会長の代理として来賓挨拶し、短い祝辞を述べた。60周年というのは本当に驚異である。コンピュータ誕生とほぼ同時(ENIACの誕生と同じ1946年)にこのソサエティが組織されたのだ。ちなみに私が生まれたのはそれより後、IBMが最初の商用コンピュータとなるIBM701を発表した1952年である。

引き続きIntelのRobert P. Colwell博士の講演があった(テーマは「この60年間にコンピュータに何が起こったか?」)。博士のスピーチはユーモアと先見性に満ちた、見事なものであった。これまでCPUチップは高性能・高速化の一途をたどってきたが、もはやその性能はニーズを追い越したとの見方を示した。敵と互いに撃ち合いながら断崖に向かって突進する、映画インディージョーンズの1シーンを引用しながら、このままインテルとARMが性能競争を続ければ共倒れになると予言したのが印象的だった。

続いて60周年記念事業の1つである、学生による Society's history competition award の結果が発表され



図-1 記念式典の案内状

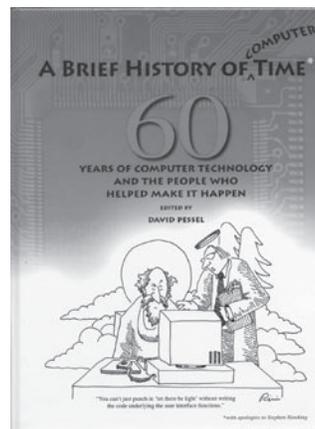


図-2 記念本の表紙

た。優勝チームはロシアで、「算盤の歴史」に関するもの(http://www.computer.org/portal/cms_docs_ieeeecs/ieeeecs/chc_winners/schoty/main.html)。

その後の懇親の場では何人かの人と話す機会があり、今年夏にバンクーバーのサミットで会ったCSの前会長とも再会した。ほとんどの人が私がこの会だけのために日本からやってきたことに驚きと謝意を表してくれた。情報処理学会としてのアピールは十分にできたと思うが、同時にIPJSを知る人が少ない(中にはIEEEの下部組織と思っている人もいた)ことも認識できた。

帰り際に参加者全員に60周年記念の本がプレゼントされた(図-2)。コンピュータの歴史に名を残した人たちがユーモアたっぷりの漫画とともに紹介されている(ただし漫画の内容は紹介されている人とは無関係)。ハッカー(この用法にはまだ抵抗があるのだが、悪い意味でのハッカー)も1人含まれているのには笑われた。

私は朝の便で帰国しなければならず出席できなかったのだが、翌10月31日にはAward Banquetが開催された。第9代情報処理学会会長の穂坂衛先生がIEEE Computer SocietyのThe 2006 Computer Pioneer Awardを見事受賞(日本人初)され、受賞のスピーチをされた。この内容は次稿を参照されたい。

(平成18年11月29日受付)

中島 秀之 (正会員) hnakashima@fun.ac.jp

1983年東大大学院情報工学専門課程修了(工学博士)。同年、電総研入所。マルチエージェントならびに複雑系の情報処理とその応用。2001年より産総研サイバーアシスト研究センター長。2004年より現職。